HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	II.ことばと社会
Author(s)	小河原, 義朗
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 30-40
Issue Date	2014-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59646
Type	bulletin (article)
Note	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
File Information	JISCHU18_04.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Ⅱ．ことばと社会

小河原　義　朗

1.　背景

これからの我々の世界はモノ・ヒト・コトの様々な交流が一層進み、よりグローバルな社会に向けて生じる様々な問題を様々な他者と様々な言語で協働して解決していくことが求められている。このような多言語多文化社会を生き、国境を越えてグローバルな人材として国際的に躍動するためには、「多文化能力」を身に付ける必要があると考えられる。そこで本授業では、山田(2013)などを参考にして「多文化能力」を「自分と違った世界の見方・考え方から問題が発生したとき、それを避けるのではなく、問題解決に向けて積極的に関わり、そこにある双方の違いから学び、そこから説得力のある主張をもって発信し、社会（人と人とのつながり）を変えていく能力」と捉える。そして、このような能力を留学生と日本人学生がクラスでともに学ぶことを通して、多文化状況における問題解決能力の育成を目指した多文化交流科目において実践することを試みた。

2.　目的・目標

本授業では、留学生と日本人学生が積極的・主体的に関わり合い、自分自身が生きている社会について日本語による「ことば（コミュニケーション）」の視点から自分自身の見方・考え方を知り、ともに考える。そして、それらを通して見えてくる様々な社会的問題について明確な主張をもち、問題解決に向けて他者と協働して説得力のある主張に高め合っていくことを目的とした。

到達目標は、以下の３点である。

(1)　自分と異なる世界の見方・考え方に出会ったとき、それを避けるのではなく、興味をもって積極的に関わる。

(2)　その関わりを通してそこにある違いから学ぶ。

(3)　学んだことから見出した問題を解決するために、説得力のある主張をもって発信する。

3. 開講学期・受講者

本授業は、2014年度第１学期に開講され、新渡戸カレッジ「多文化交流科目」(「一般教育演習」) と留学生センター開講「多文化交流科目」の合同クラスである。学部学生は抽選による10名で、日本人学生が９名、中国人学生が１名、すべて新渡戸カレッジ生であった。留学生は10名 (中国４名、台湾１名、韓国１名、インド１名、ベトナム１名、カザフスタン１名、ブラジル１名) でスタートした。初回のオリエンテーション時に、留学生には日本語を学ぶクラスではないこと、全受講者に参加者が主体的に参加する参加型学習クラスであることを伝えた。

4. 授業スケジュール

本授業は、「ことば (コミュニケーション)」に纏わる様々な社会の問題や現状について、留学生と日本人学生が相互に様々なスタイルで「読む・聞く・書く・話す」活動を通して考え、自らの主張を発表し、レポートとしてまとめるものである。全15回で、表１のように大きく３期から成る。第１期はオリエンテーションの後、毎回異なったペア、またはグループで特定のトピックについてディスカッションすることを通して学生が自身や他者との違いに気づき、互いの意見を率直に述べ合うことに慣れる。そのようなディスカッションを通して第２期は、各自が自分のテーマを設定し、それについてペアでディスカッションすることによって、自分の主張を明確化すると同時に発表の準備を行う。第３期は、各自がＡ４版１枚で作成した配布資料に基づいて口頭発表を行い、他の学生からのフィードバックを踏まえてレポートにまとめる。次章で詳細を述べる。

表１　授業スケジュール

第１期	第１回 (４/15)：オリエンテーション 第２回 (４/22)：アイスブレーキング・他己紹介 第３回 (５/13)：コミュニケーションとは何か 第４回 (５/20)：異文化の背景 第５回 (５/27)：異文化体験事例 第６回 (６/３)：「ことば」から社会を批判的に見る 第７回 (６/10)：言語的マイノリティ	ペア・グループで特定のトピックについてディスカッション＋テーマ設定

第2期	第８回（６/17）：テーマ決定・コンセプトマップ作成① ペアディスカッション① 第９回（６/24）：図書館で情報検索・収集 第10回（７/１）：ペアディスカッション② コンセプトマップ作成② 第11回（７/８）：ペアディスカッション③ アウトライン作成① 第12回（７/15）：アウトライン作成② 発表リハーサル	テーマの決定＋ペアディスカッションによる主張の明確化＋発表準備
第3期	第13回（７/22）：発表会① 第14回（７/29）：発表会② 第15回（７/31）：発表会③・まとめ	Ａ４版１枚の配布資料による発表

5. 授業内容

5.1 第１期：関係性の構築とディスカッションを通じたテーマ設定

初回のオリエンテーション後、第２回ではまずアイスブレーキングとして「部屋の四隅」「ラインナップ」などの多文化交流活動を行った。そして、ペアで相互にお互いがどのような人物なのかをインタビューし合い、その結果を他のペアに報告して他己紹介を行った。まずはお互いを知り、他者と積極的に関わる姿勢を強調するとともに、初対面時の自己開示等について話し合った。

第３回からは、４、５人のグループに分け、リーダーと発表者を決めて進めた。まず本授業の題目である「ことば（コミュニケーション）」と「社会」とは何かについて本授業での共通認識を得るために、各自で定義を書く、ポストイットに自分の考えを書いてグループで整理し全体で共有する等を行った。そして「社会」とは、国家のような大きな単位から人と人の小さな単位までを含む様々な関係や集団であること、「ことば」は言語学的な意味での「言語」ではなく、「コミュニケーション」という広い意味であることを確認した。「コミュニケーション」とは単に「会話」や「言葉による意思疎通」といった個人間だけでなく、八代他（2001）で述べられているように「私たち人間が自分自身の内部体験や外界からの様々な刺激に対して、自分なりの意味を見出そうとして努力する創造的なプロセス」(Gail E.Myers & Michelle Tolela Myers, 1992)と捉えることもできる。つまり、

コミュニケーションでは、ある行動がいかに意味付けされ解釈されたかが重要になり、異文化コミュニケーションの問題は人々の行動に対して付与する意味の相違によって生じ得る（八代他, 2001）。そこで、各自が考える「日本人学生のイメージ」等の事例を具体的に出し合うことによって、意味付け方が人によって違うこと、その違いがその人が属している社会の影響を受けることについて話し合った。

それを受けて第4回では、異文化やステレオタイプとは何か、なぜ自分はそのように感じるのかを考えるために、日常生活で各自が異文化と感じる事例とその理由をグループ、全体で共有した。まず異文化体験を出し合って自分はそれについてどのように意味づけているのか、自分自身を理解することからスタートした。そして異文化コミュニケーションで生じる問題の事例をもとにグループ、全体でディスカッションを行い、家庭、学校、サークル等、社会の中で知らないうちに身につけた社会的な規範、ものの見方や考え方、ルールがあること、そのようにして身につけたものの見方によって、コミュニケーション上どのような問題が起きるかについて話し合った。異文化について自分の体験や他者の事例を具体的に取り上げて考えることを通して、自分とは異なるものの見方や考え方に気づくこと、それによって自らのものの見方や社会的な規範を意識し、振り返ることを促した。

第5回は異文化への気づきを学生自身の視点からさらに広げるために様々な異文化体験事例を集めた文献を読み合った。そして、筆者がどのような体験をし、何に気づき、そこからどのような考えや主張を導いているか、それについて自分自身はどのように考えるか、グループになってジグソー形式で読み合い、話し合った。例えば、筆者が顔は外国人なのに実はダブルの日本人だったという体験から、日本人は日本語を話し、外国人は日本語を話せないという思い込みがあることに気づき、日本社会が多言語多文化社会になっていないことを述べる。この事例について10分で読み、思ったことや考えたことを書きとめる。そして、同じ事例を読んだ学生とペアになり、相互に読んだ内容について筆者がどのような体験をして、そこから何に気づき主張しているか、自分はどう思うかについて共有し確認する。そしてその事例を読んでいない他の学生に3分で話せるように準備した上で、それぞれ他の学生とペアになり、お互いに読んだ異なる事例について説明、共有し、話し合う活動を繰り返し行った。他者の異文化体験

ではあるが、様々な事例から様々な気づきが起こり、そこから何らかの主張に結び付いていく流れを意識化した。

第6回では自分の異文化体験からの気づきから主張に結び付けていく例として、「CLA(Critical Language Awareness)」を取り上げて紹介した。「CLA」は言語現象がいかに社会の考え方や価値観、権力・力関係や地位の不平等さを反映しているか、また、ことばを使うことを通していかにそれらを受容し、生産・再生産しているのかを問題にする（飯野他，2009)。そして、飯野他(2009)から「ことば（コミュニケーション)」の背後にある考え方、価値観を批判的に見る4つの事例「非言語コミュニケーション」「メディア・リテラシー」「バイリンガリズム」「ジェンダー」を取り上げて、前回同様にジクゾー形式で読み合い、ディスカッションを行った。

第7回では、前回の議論で出てきた言語的マイノリティの概念を踏まえ、各自が考える言語的マイノリティの事例を持ち寄り、共有した。そして、ベトナム難民で日本に来た主人公が日本で日本人として生きていく上での様々な葛藤を記録したドキュメンタリー番組を視聴し、社会における言語的マイノリティをどのように意識して克服していくかについてディスカッションを行い、「ことば（コミュニケーション)」から社会を見る視点をさらに広げることを目指した。

5.2　第2期：テーマの決定と協働による主張の明確化

第8回では第1期を通して考えてきた「ことば（コミュニケーション）と社会」に関するトピックの中から、各自がテーマを1つ決定し、「～である」「～べきである」といった目標規定文の形で自分の主張を紙の中心に書く。主張は、一般的で自明のこと、実現可能性が低いもの、具体的でないもの、わかりにくく曖昧なものにならないように指示した。これまでは各自の体験やこちらで提供する事例について感想レベルで議論してきたが、これからは自分の主張について明確に相手に伝え、説得する必要があるため、相手に自分の考えを示す場合には、必ずその考えの背景となる根拠を具体的に明示するように指示した。さらに、その主張を実現するために必要な事実や情報、データは何か、主張することによって他者から指摘されるであろう、様々な質問や疑問をできるだけ多く想定し、紙に書いた自分の主張を中心にその周りに書いていき、それらを主張との関係の度合いによって線を結ぶなどしたコンセプトマップを各自で作成する。その

後、ペアになり、そのマップを見せながらお互いの主張について必ず根拠を明示して述べ合う。そして、相手から指摘された質問や疑問、必要な根拠や新たに加えなければならない情報等は自分の主張を明確化し説得力を高める要素として、マップに追加して描いていった。

このようにして指摘された自分の主張に対する質問や疑問に応え、論理的な議論をするためには、まず事実、統計、数値などの客観的な根拠やデータ、裏付けをもとに主張する必要がある。そこで第9回では本学図書館に移動して、専門員から文献検索システムを利用した各種情報の調べ方やインターネットによる情報の扱い方、情報の所在や種類等の講義「図書館情報入門」を受けた。そして、各自が説得力のある主張をするために必要な情報収集を行った。

第10回では、インターネットや図書館等で収集した情報をもとに改めてマップを作成した。そして、前回と別のペアになってお互いの主張について発表する。発表の際に聞き手は質問や疑問、反論だけでなく、話し手の主張は何か、根拠は何か、どのような反論を想定しているかについて必ず指摘するように指示した。このように自分の主張を他者に説明し他者からのコメントを受けることによって、自分の主張を明確化する、自分の主張をサポートする資料・情報の収集を行う、自分の主張に対する反論を踏まえて論理的で説得力のある主張にすることを目指した。

第11回では、前回からさらに自分の主張をサポートする情報が増えた状態で、他者に自分の主張を論理的に説明するためのアウトラインを作成した。そして、そのアウトラインをもとにして再度前回同様に新たなペアで相互に発表を行い、自分の主張のさらなるブラッシュアップを目指した。

第12回では、前回同様にペアで発表し合うが、次回以降の口頭発表の予行演習としてリハーサルの形式で行った。具体的には前回からさらに修正を加えたアウトラインを作成し、それもとにして一人10分間の発表を新たなペアの相手に行う。聞き手は、①主張が明確か、②主張に説得力があるか、③社会との結びつきが明確か、④主張が実現できるか、⑤プレゼンテーションは論理的だったかの5つの基準について5段階で評価し、それらを改善するためのコメントを記入する。発表者はその評価とコメントをもとにしてさらに主張を改善すると同時に、次回からの口頭発表に向けて時間配分、聞き手にわかりやすい発表の流れ、パフォーマンス、必要な発表資料の内容について考えた。

5.3　第３期：口頭発表

第13～15回は第２期を通して各自が準備してきた内容をクラス全員の前で発表する。発表時間は10分で時間厳守を指示した。パワーポイントは使用せず、Ａ４版１枚の発表資料のみを作成、配布して行う形式の口頭発表である。この発表は本授業のゴールではなく、第２期でペアの他者と協働して各自の主張を高めていく活動を、ペアではなくクラス全体に広げて行う。聞き手は、各発表後、前回の５つの基準に⑥発表資料は有効だったかを加えた６つの基準で５段階評価した上で、発表者が発表内容をさらに改善して説得力のある主張にするためのコメントを記入して発表者に渡す。発表者も同様の基準で自分の発表について自己評価し、コメントを記入して振り返りを促した。このようにして発表者は全員からのコメントをもとにしてさらに情報収集、加筆修正等を行い、さらに説得力のある主張に高め、最終的にレポートとしてまとめて提出するように指示した。

6.　評価

本授業の評価は、(1)授業活動への参加状況10％、(2)各授業の事前事後課題の提出状況30％、(3)授業での発表内容とパフォーマンス30％、(4)レポート30％の４つの合計で評価した。(3)は、各自が発表後、5.3で述べた６つの基準による発表者本人の自己評価と他の学生全員による他者評価、そして時間内で発表ができたかどうかを合わせて評価した。(4)は、(3)の①～④に加え、(3)の他者評価による自由記述によるコメントと授業者によるコメントを踏まえ、どの程度改善してまとめたかを評価した。

7.　受講生の反応

授業後の無記名によるアンケート調査の中で、「留学生と日本人学生がともに学ぶことを通じて、感じたこと」の設問に対する自由記述回答が５名から得られた。原文のまま受講生の反応として紹介する。

- 留学生と直接文化について語り合うことで、お互いの「本音」に基づいて議論することができた。
- 留学生と交流するまでは、例えば韓国や中国に対して偏見に近い考えを抱いていたが、実際にそれらの国からの留学生と話をしてみて、考えを改めさせられることも多かった。また同じ人だからわかりあえるとい

う考えをこれまでは嫌ってきたが、実際に留学生と関わることで、確かにその通りであるということを思い知り、考えを改めるきっかけとなった。

・　主張を持つことは難しくないが、いかにアップグレードすればいいかは難しいと思います。クラスメートからのコメントを見て、主張の不完備はどこかわかりました。とても役に立ちました。

・　日本人と議論するのに比べ、相手のバックグラウンドをよく知らない留学生と議論するのは、テーマが社会やアイデンティティなどナイーブな問題になると気を遣ってしまい考えた意見をありのままいうことができなくて難しかったです。

・　文化背景の違いが及ぼす考え方の違いの大きさを改めて実感した。またそのために、意見の対立が生じた際に相手を説得することが難しく感じられた。

オリエンテーションで本授業を受講する動機について自由に書いてもらったところ、留学生は「日本人学生と交流したい」、日本人学生は「留学生と交流したい」が最も多く、半数がそのように答えていた。直接学生からも「留学生と交流ができて楽しい」「授業外でも交流を楽しんでいる」といった声があった。一方で相互に交流を楽しんだだけでなく、上記のように本授業を通して「いろいろな違いに気づいた」「自分の考えを改める契機になった」「議論を通して問題解決していくことの難しさを感じた」ものと考えられる。

8.　目標の達成度

本授業の到達目標は２章で述べたように３つある。それらについてアンケート等によって聞くことは難しいため、(1)(2)については毎回の授業後に各学生が書く振り返りシートから関連する記述を原文のままいくつか抽出する。

・　国や民族について、異なる文化に属する人達と話すのは初めての経験であり、とてもためになった。こういった機会は非常に経験になった。

・　私たちが普通に言ってしまう、自分の意見をちょっとあいまいにしてしまうような表現に対し、留学生は困惑したり、自分もそう言わないと

キツイ言い方になってしまうのではと思っていることも分かり、自分の言葉にも意識して気をつけようと思った。

- 留学生の方がいると「でも・・・」「そうじゃない」「なんで？」という会話が生まれて、自分自身の知らないうちに身についたルールを気づかせてくれると思いました。
- 色々な人の意見を聞いていると、コミュニケーションの根本に「相手のことを考える」ということを据えるのが大切かと思いました。今日の自分の発表で相手に分かりやすく伝わるように・・・と心がけたのは良かったと思います。
- バイリンガルだとか、いろんな言語が飛び交うことだとかは単純にグローバルでかっこいいというイメージがあったのですが、マイノリティが関連したり、あるいは言語による自己・国のゆらぎなどといった負とも言える側面があるのは新しい考えでした。
- バイリンガル教育を読んで特定の文化を受け入れるか、多様性を有するべきかは興味深く、それに関して自分は頭の中では「多様である」ことを良い事として捉えているが、感情論ではそれを良く思っていないことに気がついた。今までの学習で学んだことが頭では理解できているが本心ではそれを受け入れたくない、そういったことに対してどう働きかければよいか、考えたい。

これらの記述をもってこれから学生が出会うであろう、異文化で生じる様々な事柄について積極的に関わっていくかどうかは判断できない。しかし、本授業では積極的に関わり、その違いから何らかの学びをもたらす契機にはなったのではないかと考えられる。

(3)については、最後の口頭発表についての自己評価で、②「主張に説得力があるか」の５段階評価（ある「５」―ない「１」）が10名中3.6であった。自由記述のコメントでは、原稿の棒読みや準備不足、時間配分等、プレゼンテーションに関するものが多く、説得力のある主張に関するコメントとしては具体例やデータ不足といったことしか言及されていなかった。説得力を検討する以前に、発表時間を大幅に超えてしまうなど、パフォーマンスの問題が多かったことは、プレゼンテーションスキルについても何らかの対応が必要であったと考えられる。一方で、客観的に自分の主張について自己評価できることだけでなく、発表者の主張に他者が何をどのよ

うに指摘し、改善を促し、最終的な口頭発表に結びついていったのかについては、授業中の具体的な活動を分析することが必要である。

9. 反省と課題

最終的なレポートのテーマは、「国全体でバイリンガル教育を行うべきだ」「一般大衆こそ言葉のマイノリティ（弱者）である」「進化するモバイル社会の中においても「書く力」は維持すべきだ」「「人の話す言語はその国籍や外見と一致するとは限らない」ということを意識すべきである」「日本人は「日本に外国人がいるのは当たり前だ」という考えを持て」など、どの学生も「ことば（コミュニケーション）」の視点から社会の問題を捉え、解決に向けた主張、提案を試みていた。しかし、説得力という点では使用する用語の定義、根拠となるデータの質と量、主張自体の妥当性、社会を捉える視点の柔軟性等、学生同士の指摘だけでは限界がある。授業者が何をどこまで介入すべきか、今後も実践を重ね、検討していく必要がある。

第２期で各自がテーマを設定して発表準備を始めたころから、留学生が減り、最終的にすべての課題を終えた留学生は２名だった。理由として、課題を設定して情報収集し日本語で表現する過程が負担になっていたり、大学院入試準備のため、途中でキャンセルしたりする学生がみられた。第１期のペアやグループによるディスカッションでは減ることはなく、留学生のコメントからも楽しく参加していたことから、日本語力の負担がかからないように、後半もグループ活動を継続したり、15回をいくつかのトピックに分けて課題解決型のグループワークを繰り返したりする方法も考えられる。

また、前章でも述べたように説得力のある表現技術、論理的思考、プレゼンテーション、ディスカッション等の基本的なスキルが足りない、経験したことがない学生が多かった。そのようなスキルトレーニングを意識的、計画的に取り入れる必要がある。さらに、本授業の目標達成を評価する方法についても再考が必要である。今後はルーブリックやポートフォリオ評価の導入、各活動で実際に何が起きているのかについて着目し、教室談話データを収集して分析することも検討している。

参考文献

赤坂和雄（2012）『ことばと文化　つながる世界』柏艪舎

飯野公一・恩村由香子・杉田洋・森吉直子（2009）『新世代の言語学』くろしお出版

徳井厚子・桝本智子（2006）『対人関係構築のためのコミュニケーション入門―日本語教師のために』ひつじ書房

むさしの参加型学習実践研究会（2005）『やってみよう「参加型学習」！日本語教室のための４つの手法―理念と実践』スリーエーネットワーク

八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美（2001）『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社

山田泉（2013）『多文化教育Ⅰ』法政大学出版会

Gail E. Myers & Michelle Tolela Myers, *The Dynamics of Human Communication: A Laboratory Approach(6th ed.)*, McGraw-Hill, Inc. 1992.p.27

おがわら　よしろう（留学生センター准教授）